



Title	英語名詞由来er名詞の予備的考察
Author(s)	中瀧, 浩貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91580
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1. はじめに

英語には新たな語を作り出す様々な接辞がある。このうち、現代英語でも生産性が高いもののひとつとして、er 接辞がある。この接辞が興味深いのは、様々な品詞の語にくっついて、名詞を作り出すことができる点である。この接辞によって作り出された語を er 名詞と呼ぶ。典型的には、*singer*〈歌手〉や *player*〈選手〉〈再生機〉のように、動詞の後について、〈～する人〉や〈～するためのもの〉などという意味の er 名詞を作り出す。

本稿で注目したいのは、この er 接辞が名詞について作られる名詞由来 er 名詞である。このような名詞には(1)のようなものがある。

- (1) a. birder, caver, philosopher
b. Berliner, Londoner, New Yorker
c. backbencher, backpacker, outfielder

(Bauer, Lieber and Plag 2013: 218-219)

名詞由来 er 名詞にも(1)のように、様々な意味が見られる。(1a)は行為の対象となるものを表す名詞に接辞がついて、〈野鳥観察者〉や〈洞窟探検家〉、また〈哲学者〉などを表す。(1b)は場所を表す名詞を基に作られたもので、〈ベルリン出身者〉や〈ロンドン出身者〉、また〈ニューヨークで生活している人〉というような意味をあらわす。さらに、(1c)の例は複合名詞に er が付いたものであり、〈後方席の議員〉や〈バックパックに荷物を詰めて旅をする人〉、また〈(野球の)外野手〉を表す。

名詞由来 er 名詞は現代でも生産的な接辞である。例えば、近年では、インターネット上でのコミュニティや SNS の発展により、SNS の個々のサービスが登場している。これらの SNS の広がりに対応するように、SNS を表す名詞をもとに(2)のような新規の er 名詞が作られている。

- (2) blogger, Instagrammer, TikToker, YouTuber, vlogger

これらの新語はおおよそ、〈該当する SNS 上でコンテンツを投稿するなどの活動を通して、一種の職業として収入を得ている人〉のことを表す。

従来の研究においては動詞由来の er 名詞が主要な研究対象となっており、項構造からの分析(e.g., Rappaport and Levin 1992)や主語述語関係に基づく分析(e.g., Marchand 1969, Heyvaert 2003)など、統語的な観点からの分析が提案されてきた。ただし、本稿で注目する名詞由来 er 名詞では、er 接辞がくっつく名詞(基体名詞)がそのような項構造などを持つとは考えにくいいため、統語的なアプローチとは異なる説明が必要となると考えられる。

本稿はこのような名詞由来 er 名詞について、現在までの中間報告を行うものである。具体的には、名詞由来 er 名詞を扱った主要な先行研究を概観し、提案されている分析の整理と特徴づけを行う。そして先行研究の問題点や残された課題を整理し、今後解明されるべき課題と、可能な研究の方向性および分析案を提示する。

2. 先行研究

2.1 基体名詞ベースのアプローチ

名詞由来 er 名詞をめぐる先行研究では、大きく分けて基体の名詞に注目したアプローチと、er 接辞に基づくアプローチが提案されている。基体の名詞に基づくアプローチをとるものとして、まず、Ryder(1999)がある。Ryder によると、名詞由来 er 名詞の意味は、基体の名詞から連想される様々な知識(スキーマ)を基に理解されるとされる。また、名詞由来 er 名詞の意味にかかわる

¹ 本稿の研究は JSPS 科研費 22K13137 の助成を受けたものである。

² 本稿の一部は関西大学言語学研究会(2022 年 3 月 28 日、関西大学)での発表に基づいている。発表時に有益なご助言を参加者よりいただいた。また、草稿の段階で林智昭先生にスタイルや内容について有益な助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

スキーマの選択には、(3)のような語用論的な制約が働くとされる。

- (3) a. 基体の指示対象は *er* 名詞の指示対象が参与しうるスキーマの数を可能な限り制限しなければならない
- b. *er* 名詞の指示対象は選択されたスキーマにおいて際立ちや情報性の程度が高い必要がある
- c. 基体は一般によく定着し、話者と聴者の両方が想起しやすい形(式)である
(Ryder 1999: 291)

増淵 (2012)も Ryder と同様、基体となる名詞の知識に基づいた分析を提示している。ただし、Ryder と異なり、*er* 名詞の意味理解に利用される知識が特定の種類のものであると増淵は分析している。具体的には、Pustejovsky (1995)の生成語彙意味論の枠組みから、特質構造と呼ばれる名詞の種々の知識を記述する構造のうち、指示対象全体とそれを構成する部分や要素との関係にかかわる知識(主題役割、AGENTIVE Role)と、名詞の指示対象の目的や機能にかかわる知識(目的役割、TELIC Role)に分類される2種類の知識が利用されるとしている。これらの例として(4)が挙げられている。

- (4) a. *roofer*<屋根職人>, *gardener*<庭師>, *floorer*<床に打ち倒す人>
- b. *outfielder*<外野手>, *Londoner*<ロンドン住人>, *townner*<町人>
(増淵 2012: 59-63)

(4a)の *er* 名詞は基体名詞の目的役割にある知識が利用されている例とされる。また、(4b)は基体名詞の目的役割の情報が利用されている例とされる。

このように、増淵の分析では、基体名詞の知識のうち、利用される知識を特定することによって、*er* 名詞の意味の特徴づけを行っている。

2.2 -*er* ベースのアプローチ

Panther and Thornburg (2001, 2002)は上記とは異なり、-*er* に注目したアプローチをとっている。ただしこのアプローチは、-*er* 接辞自体がどのような意味構造を持つか、ということよりもむしろ、語形成の結果生じる X-*er* という構造自体がどのような意味パターンを示すかという見方を取るものである。このようなアウトプット指向の見方を取る Panther and Thornburg の分析は、構文文法(e.g., Goldberg 1995, 2006, 2019)で提案されてきた構文という概念を、形態論に応用したコンストラクション形態論(Booij 2010)の見方を先取りする先駆的なものであるといえる。

以降では *er* 名詞のより詳細な分析を展開している Panther and Thornburg(2001)を概観する。Panther and Thornburg によると、*er* 名詞は基体が動詞か名詞かといった区別は設けず、一括して扱うべきとされる。これを踏まえ、本稿では品詞を区別しない *er* 名詞を X-*er* と表す。彼らによると、この X-*er* が *er* 名詞の取りうる意味のパターンを指定する意味ネットワークを有しているとされる。言い換えれば、この意味ネットワークによって、個々の *er* 名詞がとりうる意味が説明される。

Panther and Thornburg (2001)の分析を具体的に見てみよう。X-*er* はまず、彼らがプロトタイプの他動シナリオ(Prototype Transitive Scenario)と呼ぶ、他動的行為についての抽象的な知識構造を喚起するとされる。このシナリオは次の通りに特徴づけられている。

- (5) a. 場所や時間といった場面設定が存在する
- b. 非対称的な相互関係を持つ、異なる参加者が(少なくとも)2人以上存在する
- c. 参加者の1人は意図的に行為を行う人間である。もう1つの参加者は、その行為によって直接的に影響を受けたり変化を被ったりする。

(Panther and Thornburg 2001: 156)

これに基づき、X-er は<職業としてある行為を行う人>³という意味をプロトタイプの意味として持ち、他の意味はそこからの拡張関係にあるとする分析が提案されている。このプロトタイプの意味における名詞由来 er 名詞の例としては、次のものが挙げられている。

- (6) tinner<ブリキ職人>, hatter<帽子職人>, whaler<捕鯨員>, driftnetter<流し網漁師>, Wall Streeter<ウォール街で金融業を生業とする人>, submariner<潜水艦乗組員>, philosopher<哲学者>

(Panther and Thornburg 2001: 157)

(6)のような名詞由来 er 名詞では、基体の名詞が直接職業としてなされる行為を表してはいないものの、仕事の作業が向けられる材料や対象を表している。

(6)のような名詞由来 er 名詞は、基体の意味がメトニミーを介して<もの>から<職業の行為>へと遷移し、その行為と人間の動作主を表す er とによって<職業人>の意味が得られるとされる。例えば、tinner<ブリキ職人>では、名詞 tin はそれが喚起する職業のシナリオにおいて、<行為を受ける対象である素材>から<職業的ブリキの加工>とメトニミー的に意味が遷移し、これに人間の動作主を表す er がつくことで、<ブリキ職人>の意味が作られるとされる (Panther and Thornburg 2001: 158)。

上記の<職業人>が er 名詞の中心義と仮定されているが、これは動作主性、習慣性、際立ちの高さ、そして文脈的独立性といった観点をすべて満たすものであるとされる。er 名詞のその他の意味は、これらのパラメータを何らかの形で満たす、概念的に近いものとして、中心義と拡張関係にあるとされる。拡張関係にある意味の例としては(7)が挙げられている。

- (7) a. <ある行為に特徴的にかかわる人・もの>
e.g., backpacker<バックパックを背負っての旅行者>, marathoner<マラソン選手>, hooper<ダンサー>
b. <習慣的・思想的に(行為志向の)傾向を持つ人・もの>
e.g., nutter, right/left hander<右・左ききの人>, flat earther<地球平面説を信じる人>
c. <持続的な所属先・関係・属性を持つ人・もの>
e.g., GOp, villager, six footer
d. <習慣的でない行為に基づく持続的な属性を持つ人・もの>
e.g., Fullbrighter<フルブライト奨学金の採用者>
e. <文脈依存の行為・過程に基づく一時的な属性を持つ人・もの>
e.g., keynoter<特別講演の登壇者>

(Panther and Thornburg 2001: 159-168)

(7a)は職業ではないが動作主性が高く、すなわち際立ちが高いものとされる。また、(7b)は習慣性があるもの、(7c)は様々な程度の行為志向性を持つもの、そして(7d)は習慣的ではないが、動作主性の高い行為の参与者であるものである。さらに、(7e)のように特定の文脈で使われる臨時的なものもあるとしている。

Panther and Thornburg と類似の分析に、Hamawand (2011)がある。ただし、Hamawand の研究は接辞としての er の役割をより重視した分析となっている。Hamawand は認知文法(Langacker 1987, 1991, 2008)の枠組みから、動作主性のドメインにおいて、er 接辞が特定のプロファイルを持つものとして分析している。具体的には、(8a)のように特徴づけられる動作主性のドメインを仮定し、er 接辞は(8b)のプロファイルを行うと述べている。

³ “a human Agent who performs an action or engages in an activity to the degree that doing so defines a primary occupation” (Panther and Thornburg 2001: 154)

- (8) a. 動作主性のドメイン：人やものが何らかの効果を生み出すための役割を表す。このドメインは特定の行為を行ったり、特定の分野で特化している人や物にかかわるものがある。

(Hamawand 2011: 160)

- b. プロファイル：er 接辞は非専門的分野や一般的な文脈をプロファイルする。

(Hamawand 2011: 183)

(8)のような分析に基づき、Hamawand は er 名詞のプロトタイプの意味を<基体によって表される一般的な行為を行う人>⁴としている。Hamawand も品詞の区別なく er 名詞を扱っているが、名詞由来 er 名詞は次のように分類されている。

- (9) a. <人が基体が表す対象物を作る>
hater, furrier, miller, sealer, slater, tinner
b. <人が期待が表すものを研究する・学ぶ>
astrologer, astronomer, geographer, lawyer, philosopher
c. <人が基体が表す場所に由来を持つ>
Londoner, Berliner, New Yorker, northerner, villager
d. <人が基体が表す属性を持つ>
nutter, corker, miser

(Hamawand 2011: 126-127)

このほかにも、Baeskow (2010)も er 名詞についての形態統語的観点からプロトタイプ分析を提案している。本稿ではその議論の詳細には立ち入らないが、Baeskow (2010)は er 名詞がプロトタイプ構造を持つものととらえ、個々の意義について形態統語的な観点からのより詳細な表示を行っている。

以上、本節では名詞由来 er 名詞に関する基体名詞ベースのアプローチをとる先行研究と、er ベースのアプローチをとる先行研究を概観した。ただし、これらの先行研究では、注目されている側面や意味的分析など、他の先行研究とどのような関係性にあるのかには、少なくとも明示的には触れられていない。このため、これらの研究を総合する形で名詞由来 er 名詞を説明していくという課題が残っている。

3. 先行研究を踏まえた名詞由来 er 名詞の分析の方向性

2 節では名詞由来 er 名詞の意味的アプローチについて概観した。本節では、さらに名詞由来 er 名詞の意味構造を解明していくために、先行研究の分析について論点を整理し方向性を提示していく。

名詞由来 er 名詞が取りうる意味について意味的なアプローチをとる際、2つの観点について検討する必要がある。ひとつは、名詞由来 er 名詞が表す意味がどのように得られるか、という点である。例えば、*Londoner* は<ロンドン出身者>という意味を表す。この時、この意味のもととなる<ロンドンで生まれ育った>という情報はどのようにしてもたらされるか、ということについての説明が求められる。

もうひとつは、名詞由来 er 名詞が表す所与の意味において、他ならぬその意味に定まることをどのように説明するか、である。さきほどの *Londoner* を例に考えると、*Londoner* は<ロンドン出身者>という意味に定まるのであって、他のどのような意味でも表すわけではない。つまり、<ロンドン出身者>という意味に定めるものについての説明が必要になるのである。

一見すると、これら2つの観点は同種のものと思われるかもしれないが、理論でどのように扱うかは別にして、基本的には別のものである。というのも、*Londoner* が<ロンドン出身者>という意味を表すことができるという説明は、必ずしも<ロンドン出身者>以外の意味は表さない、ということを含意しないからである。

上記の2つの観点を踏まえると、先行研究は決して対立するものではなく、むしろ er 名詞の異

⁴ 'a person who performs the generic action labelled in the root'. (Hamawand 2011: 183)

なる側面に注目した相互補完的な関係にあることがわかる。まず、Ryder (1999)の語用論的制約は、語が有意味なものとして理解されるために基礎となる部分であり、基盤的な側面を特徴づけたものと位置づけられる。ただし、いわばこれは他の表現についてもあてはまるものとなっており、名詞由来 *er* 名詞がそれらの語用論的制約を具体的にどのように実践しているかまでは踏み込まれていない。

Ryder の語用論的制約が様々な形で意味的に実践されているものとして、増淵の基体名詞の意味論や、Panther and Thornburg および Hamawand の *er* の意味論を位置づけることができる。すなわち、基体名詞は *er* 名詞がとりうる意味のもととなる情報を提供する役割を担う一方で、*X-er* は実際にとる意味パターンを指定する（制限する）役割を担うのである。例えば *Londoner* に見られる〈～出身者〉という意味は、*villager* など共通の意味を示すものがほかにもあるため、確かに意味パターンとして *X-er* に由来するものであると分析することができるかもしれない。ただし、*X-er* 自体に〈出身地がロンドンである〉というような情報があるわけではなく、そのような情報は個々の基体名詞に由来する、つまり、基体名詞の *London* によってもたらされるものである。

4. 名詞由来 *er* 名詞の分析における課題と総合的分析の可能性

4 節では基体名詞と *er* それぞれの役割について提案されてきた先行研究の分析について、説明が不十分なところやその背後にある前提などを指摘し、名詞由来 *er* 名詞の総合的な説明を目指す上で克服すべき課題を整理するとともに、分析案を提示する。

名詞由来 *er* 名詞の意味を基体名詞の意味から説明しようとするアプローチが直面する課題として最たるものは、名詞由来 *er* 名詞が基体名詞の意味に含まれていないような意味情報を持つ場合である。実際、増淵 (2012)はこのことについて自覚的であり、(10)の例を挙げて「自然物の目的役割と主体役割は無指定であることが多い。派生に使われるはずの目的役割や主体役割が指定されていないので、様々な意味が出てくることになる」（増淵 2012:64）と述べている。

(10) whaler, forester, laker, lander, islander, wester, easter, afternoon

(増淵 2012: 64)

増淵によると、例えば、*wester* は〈西から吹く風〉という意味であるが、*west* に〈吹く〉という情報は含まないとされる。これらについて、生成語彙意味論の特質構造だけでとらえることが難しいものであると述べている。これについて増淵は「具体的には、社会常識で動詞的な要素を補って、その動詞的な要素を「名詞-*er*」の目的役割や主体役割に組み込むという操作を行う」（同上）と述べており、理論的に興味深い。しかし、どのようにそのような操作が起こるかは論じられていない。

この課題の背後に存在するの言語の知識と現実の知識の区別である。増淵の生成語彙意味論的アプローチは、名詞にまつわる様々な一般的知識を言語の意味論に取り込むものと理解できる。しかし実際には、ある名詞について、その指示対象全般が共有する知識を名詞の意味の中に取り組んでいる形となっており、必ずしも当該名詞の個々の指示個体についての知識を参照するものとはなっていない。

実際、上記の区別が問題となる例が存在する。野球において、特定の球種を得意とする投手を、その球種を表す名詞に基づいた *er* 名詞で表すことがある。次の例はどれも、「球種を表す名詞+*er*」のパターンを示す。

(11) fast baller<速球派投手>, knuckle baller<ナックルボーラー>, sinkerballer<シンカーボーラー>, forkballer<フォークボーラー>

ここで注目すべき点は、これらの名詞で表される投手が単に上記のような球種を投げる、という意味ではない点である。例えば、*fast baller* を考えてみると、投手ならほぼ全員が速球を投げるものであるし、投げる球種の割合で速球が最も多いのが一般的である。その意味で、〈主たる球種としてストレートを投げる〉というのは、*fastball* の特質構造において、目的役割に記載されている情報であると考えられる。しかし投手であれば全員が *fast baller* と呼ばれるわけではない。この単語は投手の中でも特に速球の球速が早い投手について使われるものである。つまりこの情報は、

他の投手との比較や打者をどのぐらい抑えたかということによってはじめて生じるものである。このことは、言語の意味を理解する際に、文脈などに応じて語が表す対象の様々な知識が動員されることを示している。一方、増淵 (2012)の生成語彙意味論では、名詞由来 *er* 名詞の意味として利用される知識が、基体名詞の特質構造から得られるとされる。しかし(11)の例における＜得意球種である＞という知識は、基体名詞が指す特定の個体を持つものであり、基体名詞の指示対象が一般的に共有しているものではない。つまり、そのような個別の知識までも名詞の意味の一部として含まれているとは考えにくく、その知識を名詞の意味から説明しようとするのは無理が生じる。

次に、同じ種類に属すると考えられる知識が複数想定される場合を見てみよう。(12)の例は基体名詞が表す指示対象の機能や役割といった、目的役割の情報が利用されていると考えられる。

(12) blogger, Instagrammer, TikToker, YouTuber, vlogger (=2))

(12)の例は SNS を表す基体名詞に *er* が付いたものであり、＜～にコンテンツを投稿して収入を得ている人＞という意味である。これらの動画投稿サイトや SNS は確かに動画などのコンテンツを投稿するという使われ方がなされる。しかし一方で、大多数の人にとっては、それらの投稿されたコンテンツを視聴するという行為が主たる利用目的であり、その知識も目的役割に記載されていると考えられる。実際の名詞由来 *er* 名詞では、＜コンテンツを視聴する＞という知識ではなく、＜コンテンツを投稿する＞という知識が利用されており、加えて、＜それによって収入を得ている＞という知識もあわせて利用されていることがわかる。このような場合では、利用される知識の種類という観点だけでは、具体的な意味の制限に十分な説明を与えることは難しい。

(12)のような例はむしろ、*X-er* 自体が＜～を職業として行う人＞という意味指定を持っていることを示唆している。実際、Panther and Thornburg や Hamawand は＜～を職業として行う人＞という意味をプロトタイプとして仮定している。また、プロトタイプの意味に合う形で新規の *er* 名詞がより作られやすいというのはプロトタイプの性質を考えても、*X-er* の意味パターンに基づくことは自然な説明である。

次に *er* 接辞や *X-er* という語に着目するアプローチを検討しよう。このアプローチで課題となるのは、名詞由来 *er* 名詞が利用する様々な知識をどのように扱うか、ということである。このことはさらに2つの観点に分けて考える必要がある。1つ目は、基体名詞が参照する知識と、*er* 接辞または *X-er* が喚起する知識 (Panther and Thornburg ではシナリオ、Hamawand ではドメインで表しているもの) との関係である。これら二者の関係性について、両研究は少なくともはっきりと分析しているわけではなく、また何らかの一般化を提示しているわけでもない。ただし、Panther and Thornburg では *tinner* の説明において、*tin* の意味が＜物質＞から＜その物質を扱う仕事＞へと遷移することを説明する際に、*occupation(al) action scenario* というものに言及している (Panther and Thornburg 2001: 158)。ただしこの *occupation(al) scenario* とはどのようなものかについての詳細な説明は与えられておらず、またそれが *X-er* によって喚起される *Prototypical transitive scenario* と同一のものであるのか、または何らかの関係にある別のものなのかははっきりしない。また、Hamawand (2011)も両者の関係性について明示的ではなく、同様の課題を抱えていると言える。

er 接辞や *X-er* に着目するアプローチの2つ目の課題は、それらが喚起するとされる知識構造の妥当性である。Panther and Thornburg と Hamawand は、詳細に差異はあれど、共通して動作主性や他動性に関する情報を内実を持つ知識構造を仮定している。しかし、(13)の例は、動作主による何らかの行為についての知識が関連しているとは考えにくいものである。

(13) fifth grader<5年生の生徒>, seven footer<身長が7フィートある人>, teenager<13-19歳の間の年齢の人>

これらの中で取り上げられている特徴は、何らかの他動的な行為を踏まえて得られるものではなく、単に指示対象が持つ性質や状態、または分類である。そのため、何らかの動的な行為を想定する知識構造では説明がつきにくく、単純に拡張義と分析してしまうと、アドホックな印象がぬぐい切れない説明となってしまう恐れがある。よって、名詞由来 *er* 名詞には、＜能動的な行為＞

のパターンを動機づけるスキーマやドメイン、またフレームと同時に、＜特定の状態にあったり性質をもつ人＞というパターンを動機づけるスキーマやフレーム、またフレームが存在するとみなす方が自然であると考えられる。

それでは、名詞由来 *er* 名詞の2つのアプローチを組み合わせるとどのような分析が可能だろうか。ここでは、(13)の *fifth grader* を例に分析案のスケッチを提示する。Štekauer (2005: 46ff)に従えば、語形成に先立ち、表現したい概念がまずもって存在するはずである(cf. Baeskow 2010)。この考え方は *fifth grader* の場合でも当てはまるはずであり、表現したい＜5年生の生徒＞という概念がまずもって存在する。この＜5年生の生徒＞という概念が名詞由来 *er* 名詞によって表現される際、＜学年が5年生である＞という情報と＜特定の学年である人＞という情報が *er* 名詞の構成要素によって表現される。これらは、*fifth grade* によって喚起された①「学校における学年の制度の知識」、また *-er* によって喚起された②「特定の状態にあることの知識」に由来するととらえることができる。先行研究では、表現の意味理解のもととなる①や②のような知識がドメインやシナリオと呼ばれているが、フレーム意味論(Fillmore 1982, 1985, Fillmore and Baker 2010)では、このような知識を表すカバータームとして、フレームという用語が提案されている。このフレーム意味論に従うと、*fifth grade* と *-er* のそれぞれが喚起する知識は次のように特徴づけることができる。

- (14) a. 「学年フレーム」：ある人物が学校制度の中で、年齢や学習の習熟度などに合わせて、適切な内容の学習が提供される特定の学年に割り振られる (=①)
- b. 「状態フレーム」：ある人物が何らかの状態にある (=②)

fifth grader という語が形成される際、これらのフレームが組み合わされることによってその語の意味が形成されると説明できる。Booij (2010)のコンストラクション形態論の表記法を参考にとすると、⁵ *fifth grader* における個々の構成要素のフレームの組み合わせは(15)のように表示することができる。

- (15) a. *fifth grade* ⇔ 「{5}年生」
- b. *-er* ⇔ 「—の{状態にある人}」
- c. [[*fifth grade*]*r*] ⇔ 「{5}年生の{状態にある人}」(＝＜5年生の生徒＞)

(15)では、左側に言語表現、右側に理解される意味が表されている。矢印(⇔)は言語表現と意味の結びつきを表している。左側における角カッコ(⟦⟧)は言語表現のまとまりを表している。また右側において、鉤カッコ(「」)は言語表現によって喚起されるフレームを表している。ただし、便宜上フレームの中心的情報のみ記載している。波カッコ({})は言語表現によって指定される情報を表している。さらに、ダッシュ(—)はその部分の情報が未指定であることを示している。これらを踏まえて(15)を説明すると、*fifth grade* によって＜5年生＞という情報の指定を持つ(15a)右側のフレームが、(15b)のフレームで未指定となってる＜—の状態＞の箇所埋め込まれ、全体として＜5年生の生徒＞という意味情報が得られる、となる。

以上、名詞由来 *er* 名詞についての先行研究を踏まえ、名詞由来 *er* 名詞の全体像にかかわる分析として(15)のような分析が可能であることを示した。

5. おわりに

本稿では、英語名詞由来 *er* 名詞について、意味的アプローチを採用している先行研究について概観し、その特徴や位置づけを確認するとともに、先行研究における分析の関係性や残された課題を整理した。そして、先行研究における基体名詞に基づく分析と *er* に基づく分析は相互補完的な関係性であり、両者の知見を組み合わせることで、名詞由来 *er* 名詞の意味のより全体的な説明へとつながっていくことを論じた。また、*fifth grader* を例に分析案を提示した。今後の研究課題としては、提案した分析案を様々な表現へ展開し、またその精緻化を図りつつ、名詞由来 *er* 名詞

⁵ ここではあくまで分析案の荒削りのスケッチであり、また、フレームの扱いも含めた表示を目指しているため、Booij (2010)の表記法を厳密に用いたものとはなっていないことに注意されたい。また、Booij (2010: 81-84)では、オランダ語の名詞由来 *er* 名詞についてのコンストラクション形態論的分析を提案している。

のさらなる解明を目指すことが求められる。

参考文献

- Baeskow, Heike. 2010/2016. “Derivation in Generative Grammar and Neo-Construction Grammar: A Critical Evaluation and a New Proposal.” In Susan Olsen (ed.), *New Impulses in Word-Formation (Linguistische Berichte – Sonderhefte 17)*, 21–60. Hamburg: Helmut Buske Verlag. Kindle 版.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag. 2013. *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles. 1982. “Frame Semantics.” In Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, 111–137. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- _____. 1985. “Frames and the Semantics of Understanding.” *Quaderni di Semantica* 6(2): 222–254.
- Fillmore, Charles and Collin Baker. 2010. “A Frames Approach to Semantic Description.” In Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, 313–339. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.
- _____. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- _____. 2019. *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Hamawand, Zeki. 2011. *Morphology in English: Word Formation in Cognitive Grammar*. London and New York: Bloomsbury Publishing.
- Heyvaert, Liesbet. 2003. *A Cognitive-Functional Approach to Nominalization in English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. II: Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*, 2nd ed. Munich: Beck.
- Panther, Klaus-Uwe and Linda Thornburg. 2001. “A Conceptual Analysis of English -er Nominals.” In Martin, Pütz, Susanne Niemeier, and René Dirven (eds.), *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy (Cognitive Linguistics Research 19.2)*, 149–200. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- _____. 2002. “The Role of Metaphor and Metonymy in English -er Nominals.” In René Dirven and Ralf Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast (Cognitive Linguistics Research 20)*, 279–319. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 1992. “-ER nominals: Implications for the Theory of Argument Structure.” In Tim Stockwell and Eric Wehrli (eds.), *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, 127–153. New York: Academic Press.
- Ryder, Mary Ellen. 1999. “Bankers and Blue-chippers: An Account of er Formation in Present-Day English.” *English Language and Linguistics* 3(2): 269–297.
- Štekauer, Pavol. 2005. “Onomasiological Approach to Word-Formation.” In Pavol Štekauer and Rochelle Lieber (eds.), *Handbook of Word-Formation*, 207–232. Dordrecht: Springer.
- 増渕佑亮. 2012. 「名詞を基体にとる -er 名詞の意味について：クオリア構造による分析を通して」『学習院大学英文学会誌 2021』 54-66.